

永井晃子先生のこと

江口裕子

今から3年前に定年延長が決ったとき永井先生はちょうど定年の時期に差しかかっておられたが、その後の3年をお元気でつとめ上げ、この3月、27年にわたる東京女子大での教員生活に別れを告げられた。永井先生は昭和11年、本学の英語専攻部を御卒業後、府立第一高女、立教女学院教諭等を経て、昭和30年本学の短期大学英語科に就任なさり、昭和41年牟礼に現在の短期大学部が発足した年文理学部の英米文学科にお移りになった。その後の10数年は夢のように過ぎ去ったが、いわず語らずの間に苦楽を共にした同僚の一人として、いつか永井先生は温かく静かに心の琴線にひびく存在となっていた。生来の誠実で清潔なお人柄はキリスト教の信仰に培かれて一そう筋の通った堅固なものになっていたし、又先生の柔和さと心やさしさはキリスト教的「愛」の倫理によって陶冶されたものであった。先生の研究室の壁には「愛」という一字を記した色紙が掲げられていたが、先生が常日頃「愛」の徳に思いを潜め、これを処世訓としておられたことは明らかである。そういう方だけに先生は近年人と人との心の交流が疎かとなり、胸衿をひらいて語る機会の少ないことをいつも憂いていらっしやう。又慎しみ深く言葉少なな方だったが、心の通う友に対しては惜しみなく真実を語る方であり、その言葉は物事の是非善悪を判断してあやまたず、自らも一方に偏することのない公正中道の人としての先生の面目を伝えていた。

教育者としての先生はまたキリスト者の姿勢を徹底して貫かれた感がある。専門の講義の題目は常に「英文学としての聖書」であり、ある年は聖書から「希望」、ある年は「苦悩」、又ある年は「光」の問題を採り上げられ、又キリスト教との関連でT・S・エリオットやG・M・ホプキンス、ブレイク等の詩を講述なされた。その長年にわたる聖書の研究は、先生の講義に深みと魅力を増し加えたにちがいないし、又何よりもキリスト者としての先生のお人柄に年と共に霊的な澄明さをあたえたことであろう。そのような授業には英語英文学の知識のみならず、宗教的な道を求める学生が出席した筈であるし、教師と学生の間には他の授業には見られぬ、魂の問題に参入する共通の意識と悦びが通い合ったことと推測する。そういう点で先生が女子大のキリスト教教育に貢献なされること多大なものがあったと信じている。幸に先生は大学の近くに住んでおられて、退職後も非常勤講師としておいで頂いている。今なお、先生の温容に接する機会に恵まれているのは私共の喜びとする所である。

永井晃子名誉教授略年譜

- 1931年3月 東京府立第一高等女学科（現都立白鷗高等学校）卒業
1636年3月 東京女子大学英語専攻部卒業
1936年9月 東京府立第一高等女学校教諭
1946年3月 立教女学院教諭
1950年9月～1952年7月 Annie Wright Seminary 及び University of California
留学
1955年4月 東京女子大学短期大学部専任講師
1958年3月 明治学院大学大学院修士課程修了 文学修士
1959年4月 東京女子大学短期大学部助教授
1966年3月 明治学院大学大学院博士課程修了
1966年4月 東京女子大学短期大学部教授
1967年4月 文理学部に移籍
1974年9月～1975年9月 University of San Diego 留学
1982年 東京女子大学定年退職

論 文

- Job and Prometheus: The Quintessence of Their Tragedy*, 「東京女子大学論集」
第9巻1号 1958年12月
A Study of Symbolism in Haikai, 「東京女子大学論集」第16巻2号 1966年3月
Matthew Arnold's Use of the Bible in His Culture and Anarchy, 「明治学院大
学大学院十周年記念論集」 1966年12月
A Study of the Proverbs, 「明治学院大学大学院博士課程論集」 1967年3月
「G・M・ホプキンスに於ける神と人(1)」, 「日本ホプキンス協会東京部会紀要」第2
号 1973年3月
「G・M・ホプキンスに於ける神と人(2)」, 「日本ホプキンス協会東京部会紀要」第5
号 1976年3月
The Light in G. M. Hopkins' Poems, 「日本ホプキンス協会東京部会紀要」第6号
1977年7月